平成２７年度　鳥取県立農業大学校評価システムシート（H28.3.1）

評価基準（達成度）
A　１００％以上達成
B　８０～９９％達成
C　６０～７９％達成
D　４０～５９％達成
E　３９％以下の達成

重点目標	学生・研修生の円滑な就農の支援 １個別経営計画作成のための個別指導強化 ２農業法人等の求人情報収集と関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
1	新規就農者の育成	１　Ｈ２６年度卒業生は、２０名中、自営就農５名（含、研修後就農）、雇用就農１１、農業関連企業団体就職１、一般企業就職２、未定１。近年では非常に高い就農率であった。 ２　非農家出身学生が多い中、農業法人等からの求人が増えており、雇用就農割合が高まっている一方、短期間に退職した内容の情報も目立ち、雇用就農の定着につなげる対応の必要性がある。	１　求人・求職者情報の農業法人等との共有による雇用就農の促進 ２　雇用就農の定着支援	１　関係機関との情報共有を進め、雇用就農を促進する。 ・農業改良普及所等関係機関への雇用就農を希望する学生の情報提供 ・農業法人等訪問による雇用情報の収集 ・農業法人等を招いての雇用就農相談会の開催 （評価指標） ・農業法人等の訪問１回 ・雇用就農相談会の開催２回 ２　雇用就農者訪問による就農定着支援、就農意識と農業の実践感覚醸成のための1年次の農家実習派遣を勧める。 ・過去5年間の卒業生の動向は握（アンケート調査の実施） ・昨年度卒業した雇用就農者への面談支援 ・卒業生情報を職員間で共有できる体制づくり ・1年次の農家実習派遣の実施 （評価指標） ・雇用者及び雇用就農者の訪問１回 ・１年次農家実習派遣の実施率５０％	１ ・各コース担任から普及所や法人等に問合せしたり、普及所から雇用情報の提供が数件あった。 ・農業法人等の訪問未実施 ・7/21、11/30に雇用就農相談会開催した。 ①求人者16件、学生22名の参加、雇用就農卒業生2名の体験発表等 ②求人者19件（内2件欠席）、学生・研修生（含、職業訓練）・鳥大生（1名） ※県内の農業高校と大学にも案内、求職側の人数は不確認。 ・試行的に倉吉農高の就農志向2年生を対象に就農イメージ相談会を開催した。 （評価指標）・農業法人等訪問　未実施 ・雇用就農相談会　2回開催 ２ ・過去5年間の卒業生対象にアンケート実施中 ・昨年度の雇用就農卒業生が転職（再び雇用就農）するとの情報を得て急挙面談したが既に決心済みであった。中西部地区の雇用就農者、研修者を訪問し、状況を確認。雇用から自営就農に気持ちが移りかけている卒業生があり、相談することをアドバイスした。訪問実施5名、未実施６名。 ・卒業生情報の共有：不十分 ・1年生の農家実習派遣６名（小西大、髙濵、村上、谷川、荒松、川口（2年清水、武田）） （評価指標）・雇用者、雇用就農者訪問　一部実施 ・1年次農家実習派遣　実施率２７％	C	１ ・実施できていない農業法人訪問を確実に実施し、実際の現場情報を相互に共有する。 ・雇用就農相談会の県内高校、大学へのＰＲを強化する。 ・県内高校生就農イメージ相談会を本格実施する。 ・県内大学生対象に農業体験研修を開催する。 ２ ・アンケート結果を踏まえた就農者支援の仕組み作り。 ・卒業生の動向情報共有の意識を職員間で高める。	（第1回） ２雇用就農の定着支援について ・２年間くらいのサポートが必要。 一般に雇用就農先は従業員（同僚）も少ない場合が多く、相談相手ができにくい。 サポートの実施に当たっては、卒業するまでに学校が相談を受ける体制を整えている旨を伝えておいてほしい。 相談内容によっては、雇用側と情報共有することによる支援が有効な場合もある。 ・離職率が高いのは農業だけの問題ではないので、定着支援は2年間もは必要ない。 ・スムーズな雇用定着につながるよう、採用決定後に可能な範囲で本人情報の提供があるとよい。 ・アンケートのねらいを明確にして実施してほしい。退職の要因だけでなく、継続して勤められている要因も調査すべき。 ・農家留学研修等の実施に当たっては、雇用就農先候補あるいはその地域で実施し、その中で雇用就農後のその地域との関係作りにつながるような配慮を望む。 ・休日に農家で実習（含、アルバイト）するなど作業体験を増やしてはどうか。 （第2回） ・ネギの希望者があれば、研修を受け入れる。 ・果樹での年間雇用は難しい、野菜との連携で雇用できればいいのだが．．．。 ・部門間での連携雇用は理想だが、高い力量が要求される。 ・就職・就農しても途中で辞めるのが気になる。具体的な理由、傾向でも分かればいいのだが。 ・学生自身が自分の目標のためにどうしたらいいのか分かっていないのではないか。自分が動いて情報を得ていない感があるかも。 ・アンケート結果を今の学生に見せ、意識を高めてはどうか。
2	学生の確保	１　入学生数は平成２３年度以降、定員割れが続いている。 ２　Ｈ２２－２７年度の入学者数は、３３、２６、２６、２５、２３、２３名。	１　学生募集活動とこまめな農大情報の発信	１　オープンキャンパス(３回開催)、高校の教員対象の説明会、高校訪問に加えて地域農業後継者情報を積極的に収集する。 ２　ホームページの積極的情報更新。 ３　農業高校との関係作り（例：修農祭等の行事交流など） （評価指標）学生入学者数　定員３０名確保	１ ・オープンキャンパスを2回開催し、39名の参加を得た。 ２ ・ホームページ情報の定期的更新が一部（校長つれづれ、農大日記等）ではできているが、職員の意識が高くない。 ３ ・倉吉農高の就農志向2年生を対象に就農イメージ相談会を試行開催した。 （評価指標）・入学予定者数（2/22時点）　２０名	C	１ ・農業高校の農業担当教員との交流会開催による情報交換と担い手育成意識の向上。 ・食Ｐｒｏ．講座の効果的実施の検討。 ２ ・ＨＰ等による職員の情報発信意識向上。	

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
３	学生の営農技術向上	【養成課程共通】 １　学生の就農意欲や体力、学力は千差万別で、専攻実習での技術習得には個々の能力に応じたきめ細やかな指導が必要である。 ２　営農技術のなかには、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。 ３　多様化する農業形態のなかで営農するためには、コースを枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚をもった農業者を育成する必要がある。	１　学生個々の状況に応じた個別指導の充実 ２　計算能力を含めた基礎学力の向上 ３　幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上	１　各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、学生と職員の共通認識を図り、特に学生の苦手分野を克服するための指標として活用する。 （評価指標） ・理解度アンケートの実施（２回）とそれを基にした個別指導（随時） ２　１年生を対象とし基礎学力（計算、単位など）の把握と学力補完のための補講を行う。 （評価指標） ・学力補完補講（２０回） ・学力テスト（随時） ３　「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また校内外で「農大市」を実施し、商品ＰＲ方法を学び、対面販売を行うことで消費者ニーズを把握する。 （評価指標） ・校内技術競技実施（２回） ・農大市実施（校内７回、校外４回） ・修農祭での販売（１回）	１　各コース毎に「理解度アンケート」を前期および後期に各１回実施し、教育研修課の指導職員全体で各学生のについて情報共有を図ると共に指導方法について検討した。 （評価指標）・理解度アンケート実施率: ５コース全体で70%, アンケート結果は各専攻授業の指導に活用 ２ 基礎学力補完講座を外部講師を招聘し合計２０回実施。初回に１年生２３名を対象とした小学校レベルの計算力及び量的把握力のテストを実施。70点未満の学生１４名を必須補講対象とした。最高得点は９７点、最低点は１０点であった。面積、体積、割合、重さ・長さの講義内容とした。補講出席率は９８％であった。修了時テストで受講者１４名全員が初回テスト時より得点の向上がみられ、向上点数は５点～３５点であった。 （評価指標）・学力補完補講２０回実施、学力テスト６回実施 ３ 校内技術競技を２回実施。作物、果樹、野菜、花き、畜産、農機、農業一般の各分野から出題。学生の技術・知識の習得状況の把握材料として活用。成績上位者の表彰を行った。 校内での生産物販売実習として「農大市」を７回、修農祭での販売を１回、校外販売実習（県内）を４回、関西市場流通研修（２年生）を１回、関東市場流通研修（２年生）を１回実施。 （評価指標）・校内技術競技２回実施、校内農大市７回実施、校外農大市４回実施、修農祭販売実習１回実施	B	・本年度初めて基礎学力補完講座を試行した。学生に好評で、個々の学力アップも認められた。しかし、習得内容は反復して「使う」ことにより固定化されるものであり、専攻等の授業の中で実践させる仕掛け作りが必要。 ・次年度、新たに６次産業化に向けてのノウハウを習得するカリキュラムを新設。外部講師を招聘した授業を開始する。	（第1回） ・社会人としての基本を身につけ、自主性をもって行動ができるような人材育成が必要。 ・以前は大阪の方で実施しており、一般のお客さんの反応に直に接することができた。ＪＡなどでは、市場の協力も得て京阪神での販売促進をやっており、それらと連携することで学生がお客さんの反応をより実感できる機会になる。 （第2回） ・若者は自ら動かない、思っていても言わない。やってみれば得ることがたくさんある。そのことに気づかせる、自信を持たせることが大事。 ・農大での生産物販売に関し、学生へのコスト意識および労働単価を念頭に置いた効率意識を高める指導をしっかり行っていただきたい。 ・農大の卒業生が県下各地で頑張っている。遠くの偉大な先輩より近くで懸命に働く先輩の姿を是非学生に見せていただきたい。学生のためにも卒業生の励みにもなる。
		【果樹】 ２年間の限られた期間で、永年作物である果樹の栽培技術を習得する事は困難である。よって、ほ場の管理運営について、学生個々が主体的かつ責任を持って関わる必要がある。また１年時は幅広く様々な樹種の管理を経験させるとともに、徐々により専門的な内容に触れる機会を持たせる事が必要である。 新品種や新技術を積極的に導入し、生産現場のニーズに応じた技術習得を行わせる必要がある。	１　ほ場管理に係る学生の自覚・責任感の醸成 ２　新品種、新技術の導入と栽培技術の向上	１ 「２年時」 ・各学生の担当樹種を決定し、各樹種に係る作業を行う際には目的、方法等を該当学生に説明させる。 ・ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄの課題設定、実施、進行管理を徹底させる 「１年時」 ・２年生のﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄに係る調査等の補助を行わせる 「１，２年共通」 ・ｺﾞｰﾙﾄﾞ二十世紀については全学生に担当主枝を割当て、年間管理を責任を持って完結させる （評価指標） ・作業前説明の評価→理解度ﾁｪｯｸｼｰﾄの活用（２年生全員） ・ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ中間検討会の実施（２年生全員） ・ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄに係る調査補助等の実施（１年生全員） ２ ・ナシのｼﾞｮｲﾝﾄ仕立てを計画的に導入し技術習得を図る ・新品種、新技術に関する研修会等への出席、現地研修の実施をとおして、学習意欲の向上を図る ・ナシコンクール（梨記念館主催）の入賞を目標としてコンクールへ出品するとともに、新品種の栽培技術習得を図る （評価指標） ・研修会等への出席　４回／年 ・ナシコンクール出品	１（評価指標） ・各学生が作業前説明を行った。「理解度ﾁｪｯｸｼｰﾄ」により理解度、学習意欲向上を試みたが、ﾁｪｯｸｼｰﾄを活用した学生との話し合いの場が十分確保できなかった事、各学生の意識の差等により成果は不十分であった。 （ﾁｪｯｸｼｰﾄ記入･活用　1年：4人／全5人、2年：2人／全6人） ・ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ学習についての進行管理等が自主的にできない者もいた。ｺｰｽ内の中間検討会を行い、１月のﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ発表会当日には全員が発表した。 （２年全員：６人　　３回実施） ・ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄに係る調査等の補助を行わせた。 （１年全員：５人　　１人当たり３～４回） ２（評価指標） ・ナシ新品種研修会、ナシ査定会等に出席し新品種や新技術に対する理解を深めた。しかし、現地研修は実施できなかった。 （４回／年） ・ナシコンクールに「新甘泉」を出品した。	C	１ 「理解度ﾁｪｯｸｼｰﾄ」の活用は継続して行うが、ﾁｪｯｸｼｰﾄをもとに学生と話し合う機会を増やす必要がある。 ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ学習については、学生の自主性を基本としながら、状況に応じて職員からの声かけの機会も増やす。 ２ 新品種、新技術に対する理解の促進、向上のために、継続して県主催の研修会に積極的に参加する。また、生産現場の実態や経営上の工夫等を学ぶための現地視察の機会を増やす。	

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
		【野菜】 　コースの学生15名のうち、農業高校以外の出身者が7名(47%)、非農家の学生が８名(53%)を占めており、農業に関する基礎知識及び技術の習得支援を進めている。 　将来的な独立就農の意向を現段階で 6名(40%)の学生が示しており、実習のレベルを個別の就農目的に合わせて充実させることも重要である。 　有機栽培や６次産業化への関心を示す学生もおり、これらのニーズに対応した実習を行う必要がある。	１　栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成 ２　農業基礎知識の習得支援 ３　環境保全型農業（特栽・有機）の理解と実践	１　1年生は露地圃場での少量多品目栽培および施設での共同管理を行い、栽培の基礎技術を習得させる。2年生はプロジェクト研究において、各自の興味や実情に合わせた課題設定を行い、主としてハウス1棟を1人で管理する。 （評価指標） ・栽培品目　露地５品目/人　施設１品目/人 ・就農を目指す学生は県特産品目の白ネギ、ブロッコリー、スイカを規模を拡大して栽培 ・トレーサビリティー（栽培管理履歴）記帳の実施 ・プロジェクト学習の達成度：総合評価点 80点以上 ２　日本農業技術検定の認証取得をめざした技術解説や専攻ゼミナール等の基礎教育を実施する。 （評価指標） ・1年次終了までに3級、卒業までに2級の取得 ３　有機栽培実習と、鳥取県特別農産物の認証を受けた栽培を実施する。 （評価指標） ・有機専用圃場における実習（１５品目/年） ・特栽認証（5品目） ・野菜加工食品の製造および販売（１品目）	１　野菜栽培の実践学習 （１年生） ・各1年生は露地５～１５品目、ハウス品目１～４品目を栽培、全体で７３品目の栽培を実施し、基礎技術の習得を図った。 ・後継就農予定の学生は自営品目を想定して白ネギ、ブロッコリーの栽培を実施 ・担当品目の栽培管理履歴の記帳を実施 （２年生） ・プロジェクト研究を各２年生が完了。１名の学生は全国農業大学校等プロジェクト研究発表会へ出場。 （評価指標） ・露地５品目/人、ハウス１品目/人の栽培指導を達成 ・就農予定の学生に白ネギ及びブロッコリーの栽培指導を実施 ・栽培管理簿記帳を専攻生全員が実施 ・プロジェクトの平均評価点：８５点 ２　農業技術検定資格取得 （評価指標）・（１年生）２級取得者率：２５%（2人/８人） ３級取得者率：100%（8人/8人） （2年生）２級取得者率：　67%（4人/6人） ３級取得者率：100%（6人/6人） ３　有機栽培 ・有機圃場で現在までに１５品目を栽培 ・ジャンボピーマン、プリンスメロン、アールスメロン、ミニトマト、スイカで特栽培認証の栽培を実施 ・トマトペースト（１次加工）を製造 （評価指標）・有機栽培条件で１５品目の栽培を実施、特栽５品目を取得、野菜加工品１品目を製造	B	・少量多品目の栽培を通して、野菜栽培の広範な知識と実体験を習得させる。 ・個々の学生が興味を持つ品目や就農時に想定する営農品目を出来るだけ担当させる配慮を行う。 ・プロジェクト研究を通し観察力、問題解決力、創造力等の総合能う発を行う教育に重点を置く。 ・理解力や学習意欲に問題のある学生への指導に職員が費やす負担が大きい。指導の相対的水準を下げないよう意識する。チューターとして優秀な２年生をより活用することも試したい。	・ＪＡ西部では白ネギとブロッコリーの生産合計額が水稲を超える状況。現場の活況を反映し、白ネギおよびブロッコリーの作付け面積を増やしてみてはどうか（野菜・作物・研修共通）。 ・アスパラガスは組み合わせしやすいいい品目なので、栽培を増やしてはどうか（野菜・研修共通）。M農法人では農大卒業生がアスパラガス栽培のリーダーとして活躍している。農大生に是非見学に来ていただきたい。
		【花き】 基礎技術の習得を中心に進めているが、実用化された新技術や本県に適する新品目の導入を行い、栽培技術の向上を図る必要がある。 また、花は嗜好品であることから、必ずしも生活に必要なものではないが、身近に花がある生活をするには、様々な人に花の良さを理解してもらう必要がある。	１　栽培基礎技術の向上と花が売れる時期を目指した栽培の徹底 ２　花き品評会への参加、県内先進農家への視察 ３　花育活動の取り組み	１　学生の担当品目を決めて栽培管理を行い、基礎技術を習得させる。特に２年生は能力に応じてプロジェクト課題設定を行い、しっかりしたまとめが出来るように進行管理を行う。また、花き部門で営農を目指す場合、花の消費が多い時期（お盆、彼岸、年末）に出荷することも重要であることから、出荷時期を意識しながら栽培管理を行う。 （評価指標） ・作業の確認と作業日誌の記載の徹底 ・プロジェクト活動の進行管理 ２　１０月に開催されるイベント「花のまつり」の中で、鳥取県花き品評会が開催されるが、学生が栽培したものを出品する。また、県内生産者の高い技術に接することで、意識向上を図る。 （評価指標） ・花き品評会への出品参加　１学生あたり１点以上 ・県内先進地視察　２回 ３　「花育」活動を行うことによって、自身の花に対する理解を深め、また、他の人に花を良さを理解してもらうにはどのようにすれば良いか体験をする。 （評価指標） ・「花育」活動　２回	１　（評価指標） ・作業の確認は専攻のある午前と午後に行っており、作業日誌についてもチェックをしながら、気になることはコメントを書いている。また、２年生のプロジェクトについては日々進行管理を行った。 ２　（評価指標） ・10/23～25に行われた鳥取県花き品評会では１学生あたり１点以上の出品を行った（出品点数８点（うち学生４点、研修生４点））。 　県内先進地視察は２回実施（6/5伯耆町、9/30米子市・大山町）。また、県等が主催している各品目部会、研修会にも積極的に参加した（ユリ部会１回、花壇苗部会２回）。県内生産者の高い技術に接することで、意識向上につながった。 ３　（評価指標） ・「花育」活動として２月４日及び10日に近隣の保育園２カ所で各１回（計２回）寄せ植え教室を実施した。学生は教えることの難しさを実感していたが、楽しく活動することが出来、良い経験となった。	B	１　プロジェクト活動は学生により取り組みに濃淡があるため、積極的に取り組むよう日頃から声かけを行う。 ２　品評会への出品、先進地視察等、学生が意欲向上につながるよう指導する。 ３　売れれば良いではなく、日々単価、コストを意識させながら指導を行う。	

<table>
<tr><th>課題番号</th><th>課題</th><th>現状</th><th>評価項目</th><th>具体的方策及び評価指標</th><th>経過・達成実績</th><th>達成度</th><th>次年度の課題と改善策</th><th>外部評価委員会からのコメント</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td>【作物】
１ トラクター、田植機、コンバイン等の機械操作は未経験の学生がほとんどである。

２ 有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。

３ 法人就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い白ネギ（秋冬）やブロッコリー（秋冬）の栽培技術の習得も必要。</td><td>１　農業機械操作技術の習得

２　有機栽培技術の習得

３　白ネギ、ブロッコリーの栽培技術習得</td><td>１　農大の管理ほ場面積を維持しつつ、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。
（評価指標）
⑴理解度アンケート（よくできる、できる、もう少し、できないの４指標）でのトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できる」以上の評価が８０％以上。
⑵耕耘技術競技の実施
50分/10a以内の学生50％以上
【参考】前年平均時間49分４７秒

２　有機栽培技術導入ほ場を前年並みに確保。
（評価指標）
理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が８０％以上。

３　白ネギ（秋冬）、ブロッコリー（秋冬）を栽培
（評価指標）栽培面積の維持
理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が８０％以上。</td><td>１　農大の管理ほ場面積は維持し、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け水田での作業面積を確保した。また、トラクターでの耕うん技術競技を８月に実施した。
（評価指標）
⑴理解度アンケート集計結果（2月実施：1年４名、2年３名中）「できる」以上
トラクター：86％（1年3名、2年3名）
田植機：71％（1年2、2年3）
コンバイン：71％（1年2、2年3）
⑵耕耘技術競技（1年４名、2年３名中）
50分/10a以内の学生：71％(1年3、2年2)

２　有機栽培技術導入ほ場を３ほ場（前年と同じ）確保。
（評価指標）
理解度アンケート集計結果（2月実施：1年４名、2年３名中）「できる」以上：43％（1年1、2年2）

３　白ネギ（夏、秋冬）3a、ブロッコリー（秋冬）3aを栽培
（評価指標）
理解度アンケート集計結果（2月実施：1年４名、2年３名中）「できる」以上： 86％(1年3、2年3)</td><td>B</td><td>１　理解度アンケートで１年生の半数が理解できていない項目があることから、一人当たりの実習作業面積をより多く確保する。

２　作業実習時間の割合が多かったことから、座学の割合を増やし、理解度向上を図る。

３　ほとんどの学生が理解できていることから引き続き、今年度と同様の内容で技術習得を図る。</td><td>・ＪＡ西部管内では、白ネギとブロッコリーの組み合わせが、水稲より所得が上がっている。もう少し面積を増やして欲しい。西部の学生がいたら、ぜひ栽培を勧めて欲しい。ネギは、水稲との組み合わせでもできる。</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>【畜産】
１　畜産コースにおいて、非農家出身学生が多数を占める状況では、卒業即自営畜産経営は難しいため、将来的自立も見据えながら畜産関連業種又は農業法人就農に大きく力を入れる。
２　畜産関連業種又は農業法人が本学学生に求める人材とは、家畜（牛）の基本的管理技術及び畜産の管理用機械（ホイルローダー等）、飼料用作物関係機械の操作技術を習得した人材である。</td><td>１　就農または農業法人への就職状況

２　牛の繋養、誘導技術の習得

３家畜管理用機械機械の操作技術の習得、飼料用作物関係機械（ラッピングを主体として）の操作技術の習得</td><td>１　農業法人、先進農家との積極交流（訪問、夏期研修等）による就職マッチングを行う。
（評価指標）
農業法人等就職者率(自立就農含)
１００％

２　乳牛および和牛の共進会に参加を目指して飼養管理技術の習熟(業界の求める人材育成）を図る。
（評価指標）
各共進会への出品頭数及び上位入賞頭数

３ ①飼料給与･調製、②牛舎内の糞及び敷料の搬出･運搬、③糞乾燥機械④搾乳作業等日々の継続した飼養管理の実施を図る。また、⑤飼料用作物関係機械（耕運～収穫・調製作業）についても可能な限り体験実習を実施する。
（評価指標）
理解度アンケートでのコンプリートミキサー、ホイルローダー、搾乳機械の操作が日常的にできるまた、ロールラッピング機械の操作が１人でできる以上の評価。</td><td>１ 法人Ｓ牧場において農家留学研修（8/31～9/25)を実施。
（結果的には当該牧場への雇用就農にはならなかったが、別の牧場に内定。）
（評価指標）・ 農業法人等就職者率(自立就農含)　１００％
２
・中部酪農共進会に乳牛２頭出品、1年生２人が牛の誘導を行い、１頭が上位入賞（１等賞４席）。
・県共進会（9/26）に乳牛２頭を出品し、２人が誘導した。出品前に職員が出品牛への飼料給与方法を指導した。
・専門技術者から誘導技術及び毛刈り技術を学んだ。
（評価指標）・各共進会の成績
<table><tr><th>共進会名</th><th>出品頭数</th><th>上位入賞頭数</th></tr><tr><td>中部地区共進会</td><td>2</td><td>1</td></tr><tr><td>県共進会</td><td>2</td><td>0</td></tr></table>３
・日々の専攻実習において①飼料給与･調製、②牛舎内の糞及び敷料の搬出･運搬、③糞乾燥機械④搾乳作業等日々の継続した飼養管理を実習している。
・⑤飼料用作物関係機械操作（収穫・調製作業）を実習体験した。
（評価指標）
・理解度アンケートの実施結果
<table><tr><th rowspan="2">作業機械</th><th colspan="2">理解度（学生4名の平均点）</th></tr><tr><th>7月</th><th>1月</th></tr><tr><td>コンプリートミキサー</td><td>56</td><td>70</td></tr><tr><td>ホイルローダー</td><td>56</td><td>75</td></tr><tr><td>搾乳機械</td><td>12</td><td>20</td></tr><tr><td>ラッピングマシーン</td><td>20</td><td>67</td></tr></table></td><td>B</td><td>１　２年生は、マッチングを目的とした個別農家の訪問を予定している。

２　乳牛の誘導と継続出品を図り、和牛についても誘導（調教）と共進会への出品を行う。

３　１年生は人によりローダーやミキサーの操作にやや習得に差があるため今後操作技術の向上を図る。</td><td></td></tr>
</table>

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
		【農業機械】 １　農業法人への就職や就農を目指す学生にとっては、トラクター、コンバイン等の大型農業機械の運転操作を行う上で、大型特殊免許の取得は必要である。 ２　農業法人等から農業機械の操作技術のレベルアップを求める意見がある。	１　大型特殊免許の取得 ２　農業機械の操作技術の向上	１　試験日までの練習期間が限られているため、1年生をグループ分けし、また、練習日を計画的に設定し効率的な練習を行う。 ・グループ①　練習期間（6月1日～6月18日） 試験日（6月19日） ・グループ②　練習期間（6月22日～7月13日） 試験日（7月14日） （評価指標）1年生の大型特殊免許の合格率（80%） ２　農業機械の取り扱いに不慣れな学生を指導対象学生とし農業現場で使用頻度の高い、刈り払い機及びトラクターの取り扱いについて、重点的に実習を行う。 ・刈り払い機：重点指導期間（10月：６名） 実習（草刈り）5回、確認試験（実技）、習熟度アンケート ・トラクター：重点指導期間（11月：４名） 実習（ロータリー耕耘）5回、確認試験（実技）、習熟度アンケート （評価指標）確認試験の合格点達成率（80%）	１　大型特殊免許の取得 練習計画に沿って練習を行い、主に午後の専攻実習を練習に充てた。 ・グループ①（１年生12名） ＊練習回数（13回） ＊合否結果（11名合格、1名不合格） ・グループ②（１年生10名＋グループ①の不合格者1名の計11名） ＊練習回数（16回） ＊合否結果（9名合格、2名不合格） （評価指標）・合格率：実績100%（３名の不合格者は、再試験で合格） ２　農業機械の操作技術の向上 ・刈り払い機（草刈り）実習 ＊該当者無く実習未実施 ・トラクター（ロータリー耕耘）実習 ＊２名実施　・果樹科2年：農業法人へ就職 ・花き科1年：機械操作苦手 ＊実習回数（計画５回→実績４回） ・12月下旬～2月上旬（圃場１回、屋根付圃場３回 ＊確認試験（実技）・未実施（降雪等で圃場使用不可） ＊習熟度アンケート ・トラクター操作と耕うん手順の理解度について実施。 （評価指標） ・合格点達成率（５０%） 注）4回目の実習の操作状況を確認試験に充て採点した。	B	１　大型特殊免許の取得 ・トラクターが2台しかなく、練習時の乗車までの待ち時間が長い。 →次年度はグループ数を増やし、１グループ当たりの人数を減らすことにより、待ち時間の減少に努める。 ２　農業機械操作技術の向上 ・トラクターの利用調整や悪天候により、圃場での実習時間が確保できなかった。 →次年度は、十分な実施期間を確保し、圃場での実習時間の確保が必要。	・機械の実習（練習）圃場が必要なら提供することは可能。機械も使ってもらっても良い。必要なら言って欲しい。 ・干拓でも、そういう機会は提供できる。雨の日でもできる。事前に言ってもらえれば圃場での実習にも対応できる。
4	社会情勢に即応した実践教育の実施	１ 農業現場に即したプロジェクト活動（卒論）の課題設定と、実用技術を意識した取り組みを進めている。 26年度のプロジェクト成果のうち生産者の関心が高いナシ新品種の栽培法に関する成果を１件発表した（果樹研究同志会・果樹特技普及員合同研究発表会）。また、実家の農業経営改善に結びつく水稲の施肥試験に取り組んだ成果１件を発表した（農村青年冬のつどい）。 ２　１・２年とも講義の履修内容として、年２回の地域貢献活動（ボランティア）を位置づけている。 26年度は学生41名の内、39名が少なくとも１回、32名が２回以上実施した。	１　実用性の高いプロジェクト成果の確保 ２ 地域社会との関わりの促進	１　実用性を意識した課題設定と実施に努め、学生が就農後に活用でき、生産現場のニーズにも応えられる成果を確保する。 （評価指標）校内発表会以外の情報提供の場を３件以上確保する。 ２　引き続き地域貢献活動の情報を収集して学生に提示し、取り組みを促す。 （評価指標）学生による地域貢献活動（１人２回）の実施率１００%を目指す。	１ ①野菜コースの学生が取り組んだプロジェクト活動のうち、２件が、野菜特技普及員の成果発表会の中で発表された（２月５日）。 ②上記内の１件が、普及員の要請を受けて、JA鳥取中央倉吉メロン部会において発表された（２月１８日）。 ③プロジェクト課題ではないが、作物科１年生が水稲の肥料試験に取り組み、その成果を地域内の集落との交流会の場で発表した（10/28）。 （評価指標） ・校内以外の成果発表回数３回　→　のべ４回（課題としては３件，うち１課題は１年生による自主試験の成果） ２　ボランティアの実施率は、少なくとも１回以上行った学生が９５%（37/39）、２回以上行った学生が８７%（３４/39）となっている（2/23時点）。１回以上の実施率は年度中に１００%を達成する見込みだが、２回以上の実施率は目標を下回る可能性がある。 （評価指標） ・ボランティア２回以上実施率１００%　→　８７%	B	１　今回は野菜コースの成果に限定されたが、他のコースでも現場ニーズを意識した課題設定を働きかけたい。また、成果の活用場面の拡大も模索したい。 ２　取り組みの遅い学生に対して、定期的に実施を促すよう心がけたい。また、インターネット等で、独自に情報収集することも働きかけたい。	・地域の若い世代は、地域の農業、農地、水路、土地の区画の経緯について、知ろうともしない。上の年代も教えようとしない。その辺にアプローチすることが重要と考える。 ・法人に雇用された新規就農者は、縦のつながりも大事だが、青年会議等の横のつながりも大事。 ・JAの生産部は、年齢に関係ないつながりがあるが、部門が違うとなかなか取っつきにくい。地域の活動に参加するのも大事なこと。 ・農業、仕事だけにとらわれず、自分の仕事に関係ないこともやっていかないと、いろんな大変さがわからない。また、自分の仕事以外のことに参加することは、次のステップ（スキルアップ）につながる。

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
5	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	1　研修生の目標は、共通して就農に要する技術・経営ノウハウを習得することであるが、各者の状況・背景（希望の形態（自営就農志向か雇用就農志向か）、農地等の基盤の有無、自己資金の状況等）は各々異なる。個々の状況把握を丁寧に行い、各者に最も適した就農に導くことが必要である。 2　今年度の研修改編について、担い手農家、受講希望者、関係機関、県内大学等への周知・PRの上、新たな研修制度の積極的活用を促す。 3　公共職業訓練（アグリチャレンジ研修）の委託実施にあたっては、研修終了後の進路において、他機関の研修制度の活用が見込まれる。また先進農家実践研修の新規運営においては、研修生就農予定地域での受入体制整備が必須となる。このことから、各関係機関との結節を一層意識した調整、コーディネートが求められる。 4　いずれの研修制度においても、漫然とカリキュラムをこなす受け身の研修ではなく、研修生が自らの課題、当面の目標を意識し、限られた期間ながらも有効な研修となるよう工夫を要する。	1　研修生に対する就農サポート体制の充実 2　研修制度の情報発信 3　研修コーディネート機能の強化 4　研修の動機づけ	1　研修開始時・終了時のみならず、研修期間中に個別面談を複数回実施しながら、各研修生に適した就農へのアドバイス、必要な関係機関との調整を実施（就農打合せ会開催等）する。 （評価指標） ・研修終了時の評価アンケート（４段階評価　◎、○、△、×）に、就農に向けたアドバイス、支援に関する評価を加え、○以上の評価８０％以上 2　担い手育成機構との連携のもと、県内外就農相談会でのPRのほか、各種会議、研修会等での制度紹介に加え、各市町村、JA、、県機関、県内農家等を直接個別に巡回し周知する。 （評価指標） ・新規研修受講者数の定員確保 　アグリチャレンジ研修　20名／期 　先進農家研修　　５名程度／期 3　関係機関との調整のもと、各研修生の研修・就農支援を中軸としてコーディネートする研修調整員を新たに配置し、研修制度のつなぎ、各地域での研修受入体制づくりを進める。 （評価指標） ・先進農家研修実施市町村　５市町村 4　研修制度別に集合研修を定期的に実施し、各研修生から研修状況報告や自らの当面の研修課題・目標等の発表の場を設け、必要なアドバイス、軌道修正を行う。 （評価指標） ・発表内容の確認	1 7月開講研修より、受講申込者への事前面談を実施し、就農に対する考え方に加え、家族状況や就農基盤等に関する詳細聞き取りを実施。研修期間中も各者の状況に応じて個別面談、関係機関との就農打合せ会を随時実施したほか、日頃の関係機関との情報共有に留意した。 （評価指標）・研修終了時評価ｱﾝｹｰﾄ 就農に向けたｱﾄﾞﾊﾞｲｽ・支援に関して○以上の評価：100％ （7月修了者）回答　4/6 1月開講6か月　　4名(既就農者1名) 4月開講3か月　　2名 （10月修了者）回答 3/5 10月開講12か月 1名 7月開講3か月　　4名 2 就農相談会（県内4回、県外６回）、生産部等役員会（５回）、各種研修会（６回）、各種担当者会議（１２回）、農家訪問（２９件）等により周知。先進農家実践研修は、地域・生産部を主体とした実施体制構築にあたり事前調整に多大な労力を要することから、周知を図っているものの５名規模での運用には至っていない。 （評価指標） ・ｱｸﾞﾘﾁｬﾚﾝｼﾞ研修 1期　申込者:20名、受講者:18名 2期　申込者:22名、受講者:18名 ・先進農家実践研修 1期　申込者: 2名、受講者: 2名 3　8月より研修調整員配置し、各地域にて生産部を受入主体とした研修実施体制づくりの働きかけを行った（琴浦町ミニトマト生産部、湯梨浜町羽合ブドウ生産部、北栄町ながいも生産部）。 （評価指標）・研修実施できたのは２町（北栄町、湯梨浜町） 4 （評価指標） ・スキルアップ研修においては、５月以降毎月１回集合研修を実施し、各自の毎月の研修目標、取組状況確認の場とした。	B	1　引き続き、各段階での本人面談を基本対応としつつ、早い段階から関係機関と就農支援方針について共通認識が持てるよう、連携に留意する。 2･3　産地主体型の研修受入及び就農サポート体制が各地で構築できるよう、まずは先進農家実践研修活用の数件のモデルケースを関係機関とともに作る。 4　スキルアップ研修に加え、先進農家実践研修においても集合研修を実施（各期 年３回程度）することとし、各研修生の動向・進捗を把握しながら研修を進める。	・アグリチャレンジ研修は目標が明確な人とそうでない人が混在している。研修が短期間であることを踏まえると、目標がある程度はっきりしているのが望ましい。ハローワークとうまく連携し、良い制度としてうまく機能していくよう期待する。 ・アグリチャレンジ研修が、農業がどういうものかを認識してもらう機会となることが大切。 ・果樹の新規就農を進める上で、優良園の情報提供等を含め、生産部との連携を強化しながら研修制度を運用していくことが重要。引き継ぐことができる場所を明確にしておけば、就農希望者が現れた時点で、より具体的な話ができるかもしれない。